

千葉県勝浦のスルメイカの昼釣について

水産業改良普及員

糸 満 盛 健

1. はじめに

従来、イカ釣は種類をとわず夜間でなければ釣れないということが、長い間、伝承されてきたことである。このジンスをくつ返し、千葉県勝浦漁協ではスルメイカの昼釣が行われているとの紹介記事が勝浦漁協青年部により業界誌に掲載されていることを知り、このスルメイカの昼釣が本県のトビイカに導入できないものかと考え、視察研修に選定した。

2. 昼釣の動機

千葉県の昼イカ漁船は約千隻、そのほとんどが5トン未満船である。近年、勝浦地区では5トン未満船の増加傾向にあり、その目的は昼イカ釣にある。

漁場は九十九里浜沖合、勝浦沖合等、県下沖合の大陸棚を主漁場として、南は静岡県下田沖から御前崎、北は宮城県の金草沖、岩手県の大船渡沖、青森県八戸沖等の日本海、三陸沖にまで出漁している。

最初の頃は、いく先々から、そんな簡単な原始的なもので、しかも、5トン未満の小型船に、はるばる日本海くんだり、前代未開の昼間にイカ釣を行うということで、同情のまなざしで見られたとのことである。

古老漁業者の間では、以前から深層まで糸を落すことによって、昼間でもスルメイカが釣れることは知られていたようである。ただ長い間、夜間の火光利用で釣ってきたために、知りつつも従来の方法をかえるには不安がつきまとい、新しい方法に転換できなかったとのことである。

昼釣が大きくクローズアップされたのは、夜間イカ釣の過剰設備の競い合いからである。

夜間イカ釣には集魚灯が必要である。船上で輝らされるライトのパワーいかんによって、魚群形成の濃密度が大きく影響をうけるがために、より大きなパワーを求めて、借金による借金で100万円余りもする発電気設置の過剰競争がくり返されてきた。

とどめのない過剰設備競争の悪循環を何とか抑制しなければということ、一人一人が共通した思いとして胸に秘めていた境に、設備費のかからない昼イカ釣が行れたために、現在、ほとんどの5トン未満船が昼イカ釣に転換している状況である。

夜イカ釣と昼イカ釣の装備比較は、表1の通りである。昼イカ釣における45,000円の手動巻きは、一本釣で使用されている自家製作の手動巻きが代用できるので、4,000円の道具費で容易な簡単な漁具である。

スルメイカの漁期は8月下旬頃から8月上旬までの8ヶ月余りの期間である。盛期期は8月～11月の夏から秋にかけてである。1～2月の冬期はスルメイカは少なくなり、ヤリイカが主体になる。

5トン未満船の年間操業サイクルは、イカ釣を中軸として、イカ漁期までのつなぎ的な漁業として、

アジ、サバ、イサキ、キンメ、ムツ等の根付及び回遊魚の釣漁業が行われている。

漁場は水深150～250メートルの大陸棚縁部に形成され、なかでも主漁場になっているところは陸地に向けて海溝状に切れ込んでいる周辺とされている。本県のトビイカについても、同じ漁場であってもニーチキャーバイ（島に向かって流れる潮流）がよいといわれているように、時期、海況等により漁場の移動は多少あるとのことである。

3. 漁具の構成

漁具の構成は図の通り、道糸、ウレタンゴム、海中ランプ、ナイロン糸、角、錘りの部分から構成される。道糸はヨリワイヤー28～29番の太さで長さ70～80メートルである。道糸の下に緩衝部分として1メートルのウレタンゴムを付ける。そして、ナイロンテグス40号太さの枝糸を用い、一枝に27～35本の角をつける。ツノの間隔は上層は2～4メートルに1個つけるが、深層にいくに従い10センチ程度ずつ間隔を短くしていく。ナイロンテグスも最初の部分は40号の太いものを使用するが、ツノ5本を基集に順次号数を落し細目にしていく。ツノは鉛角で、長さ10センチ、重さ50グラムのおおきさである。鉛の部分をお青色の糸で巻き覆う。先端に錘り70～100勿太をつける。ツノの間隔は、イカの手がからみ合わない間隔であれば、それほど気にとめる必要はないとのことである。

4. 昼イカ釣の利点

昼イカ釣の成果として、次のことがあげられている。

1. 小型船でわずかな経費で出来る。
2. 簡単な漁具であるので、漁具あつかいの技術に、それほど経験を必要とせず、どの船も平均した水揚であり、装備にもものを言わせる漁獲の多寡がなくなり、資源の公平分配になった。
3. 夜間の急激な天候の変化、寝不足による疲労、それから惹起する衝突等の事故がなくなり、家族が安心であるとともに、一家団らんの時間をもてるようになった。
4. 夜イカの場合、ほとんど全出力運転で回転するので燃料消費が大きいおが、昼イカでは低速運転で操業するので油代が少ない。

以上の4点を利点にあげている。漁獲量の比較については、夜間の火光利用がよいようである。昼釣においても食いの良い時間帯は朝と日没である。ただ、夜間釣の場合、漁獲量で少々のおおきさはあっても、多額のお設備が伴うため、経営面からの損益をみると、スルメイカが豊漁であった昭和40年代とは変り、ここ2～3年急激に減少している資源状況ではペイできるほどではないとのことである。

昼イカ釣漁業者が異口同意に語ることは、これまで、資源食いつぶしに終始した。

漁業技術のありかたに反省して、ほどほどの資源を、ほどほどの漁法で、ほどほどに漁獲して、資源の再生産維持を図りながら、ほどほどの豊かさの生活ができれば、漁業として満足すべきではないかということであった。

5. 導入の可能性について

本県のトビイカ釣については、県水試のトビイカ釣漁業試験（当間嗣誠氏）によって、いろいろと明らかにされている。試験結果は表2のとおり、自動イカ釣機、友餌釣（引掛式とも称し、現在県下で行われている方式）、手動イカ釣の順になっている。自動イカ釣に使用されている連結針（擬餌釣）でも釣れることが明らかになっているので、それから推察して27～35本連結の千葉方式の鉛ツノでも可能性あるものと思われる。

ただ、スルメイカの昼間の蛸集形成が250～300メートルの水深にあるのに対し、トビイカの場合700～800メートルの深い所にあるとの漁業者の話である。加えて、トビイカは手が切れ易いことが指摘されているので、掛っても、船上引上げまでの残存率が問題かと思れる。

切腕を少なくする緩衝部分として、道糸と枝糸の間に1メートルのウレタンゴムを付けてあるが、この部分が水深の相違で大きく違う抵抗をどれだけカバーできるかも未知数である。

ところで、県内のトビイカ漁業はキロ当り300円、盛漁期には100～150円にまで価格が落ちるために、マグロ漁獲を目標とした副的ものとして行われており、重要視された漁業とはいえない。しかし、最近の漁業の動向は、そのような悠長な資源的ぜいたくを言っておれない緊迫した時代であり、早晚、見直されべき資源の一つと思れるので、昼釣まではいかなくとも、旧態依然のワクヤーによって、海面まで浮上させ、一尾一尾手カギで掛ける方法より、もっと効率的な漁法の導入は必要かと思れるので、トビイカ釣に導入するには、多くの未知数はあるが、試行錯誤の問題解決の心構えに、漁業者の経験や感覚で蓄積された「カン」をプラスして、それから湧きでてくるアイデアに大きな期待をよせ時期を待つて導入を試みたい。

表 1. 装備費の比較

昼 釣		夜 釣	
イカ手動巻き	1台 45,000円	イカ自動巻	5台 100万円
イカ角	30本 1,500	発電機(設備費共)	40W 100万円
ワイヤー	2,000	電球	14個 5万6千円
ゴム・クルリ	500	イカ角	1万5千円
		ナイロン	3千円
計	49,000円	計	2百7万4千円

図 2 : 漁具の構図

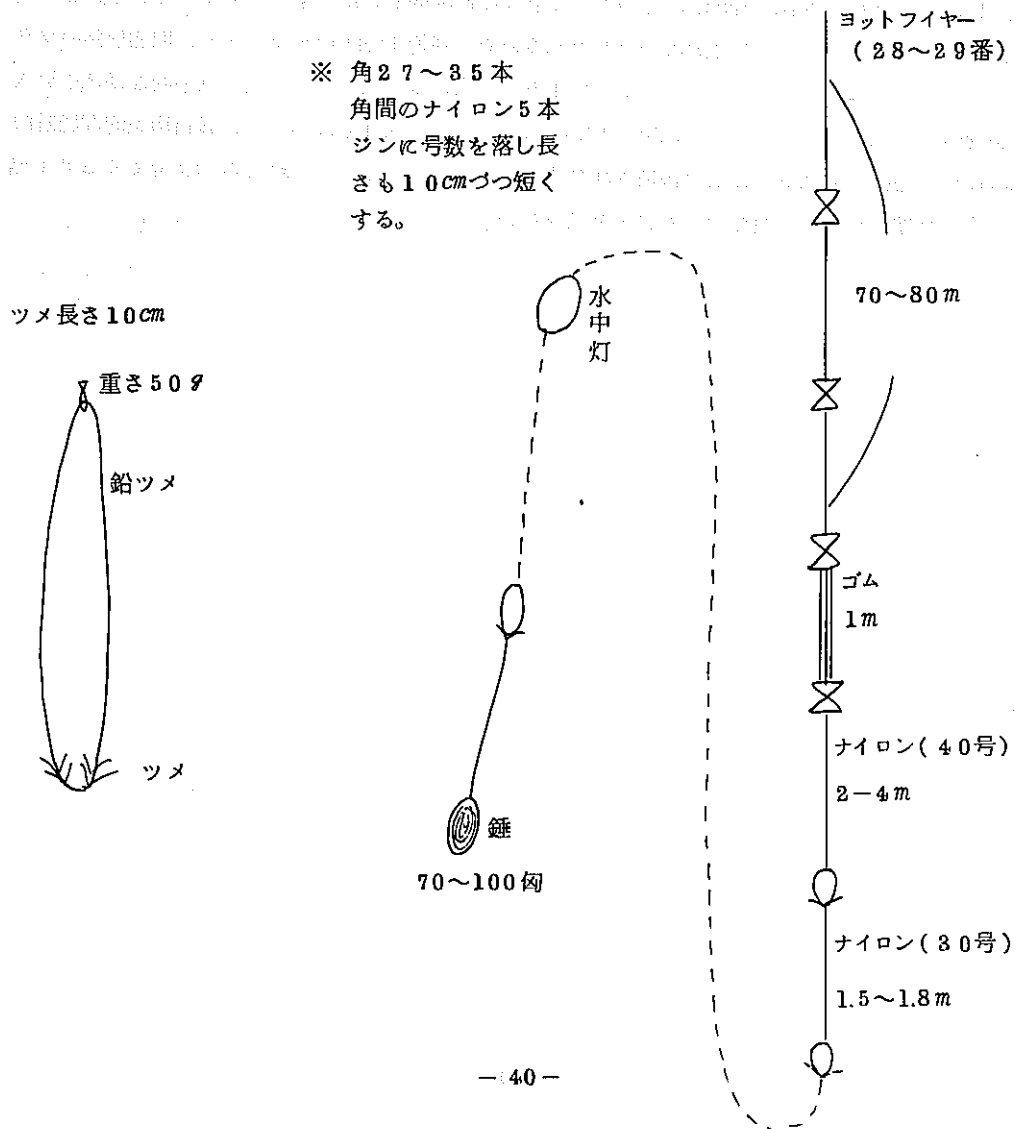
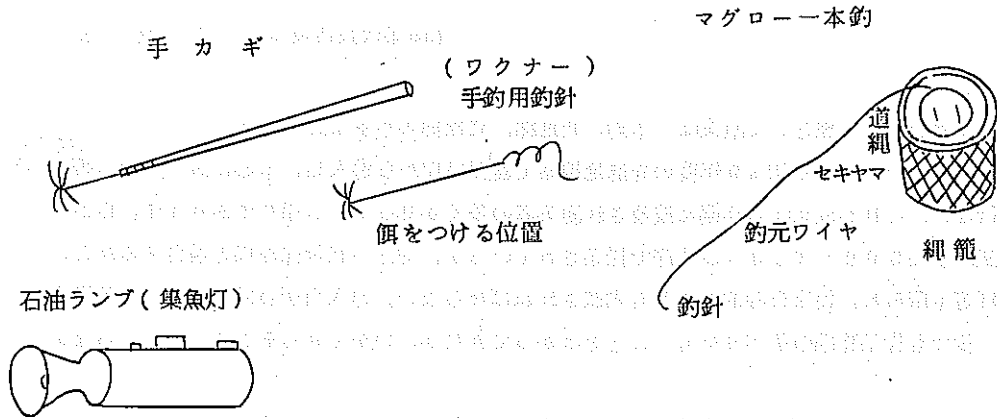


図 2. 沖縄のトビイカ釣具



(沖縄県水試, トビイカ釣漁業試験)

当真嗣誠氏より

漁法別漁獲比

年月日 漁況	1970 7.27~7.29		1970 9.1~9.4		1970 10.24~10.29		1971 6.26~6.30		備考
	尾数	%	尾数	%	尾数	%	尾数	%	
自動イカ釣機	178	62.67	195	59.63	88	47.51	38	80.85	イ針 (擬餌)
手動イカ釣機			35	10.70					全上
友餌釣 (引掛式)	106	37.33	97	29.66	97	52.48	9	19.14	餌はトビイカ
計	284	100%	327	100%	187	100%	47	100%	

(沖縄県水試, トビイカ釣漁業試験)

当真嗣誠氏より

年月日	1970 7.27~7.29		1970 9.1~9.4		1970 10.24~10.29		1971 6.26~6.30		計	
	漁尾数	切腕数	漁尾数	切腕数	漁尾数	切腕数	漁尾数	切腕数	漁尾数	切腕数
自動イカ釣機	178	155	195	140	88	58	38	12	499	365
手動イカ釣機			35	12					35	12

(沖縄県水試, トビイカ釣漁業試験)

当真嗣誠氏より